疑義

3380

114
A 4170

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

昔日閣下朝ノ期迫ルヲ以テ小生其言フ所ヲ盡サス敢テ又其言アリ幸ヒニ之ヲ聞ク
閣下ノ言ニ曰ク宜敎使ニ敎ヲ敷シメ民ニ上下ノ分ヲ知シムト又曰ク自主ノ權ヲ与フテ民ニ
家業ヲ廣ナシムト小生退テ考フルニ上下ノ分ヲ嚴ニスル自主ノ權ヲ与ヘ進ク已ニ自主ノ
權ヲ与フル上下ノ分ヲ嚴ニス可ラス上下ノ分ヲ嚴ニセサル西敎ヲ以テ敎トナスニ非サレハ
不可請之ヲ詳論セン夫上古未タ種族

ノ分レサル其祖ハ其子孫ノ君ニシテ其子孫ハ
其祖ノ臣タリ其後人種ノ分ルヽニ従ヒ其祖
ノ出所不詳人々各土ニ群衆相争フニ至リ
ムアルナシ故ニ勇猛ナル者互ニ其君タリ此時
ニ当リテ各土其教トナス者謬妄附會曾
テ人事ヲ説カスハ其祖ヲ神トシテ愚民ノ
心ヲ惑ハスノミ故ニ各人カヲ以相制シ其下上
ノ衰ヘルヲ見ル其位ヲ奪フニ已ムナカ各土ノ
君長モ亦相争フニ已ムナシ故ニ君臣ノ道ヲ
知ルモノナシハ我国海中ノ小嶋ニシテ他ノ種
族ヲ見ルナク亦他教ヲ聞クナシ故ニ人々
其主ヲ神トスルノ教ヲ信シ其忠所ノ祖ヲ教
シテ長ク君臣ノ形ヲ為セリ是後世ノ所謂
神教ナリ中世帝王ノ類ヲ至ツテ人文開開
ルト雖モ未タ人々自ラ其身ヲ保獲スルヲ知
ラス常ニ君名者ノ命ヲ受ケテ其身ヲ保獲
ス故ニ君臣ナル者立アリ是則漢土ノ君臣ノ
間ヲ嚴ニスルノ教ノ因テ立ツ所ナリ然而他各

国土地相連續皇国漢土ノ山海ニ限ラルヽカ如
クナラス故ニ互ニ相併呑猶上世ノ如クニシテ
大ナルノミ故ニ教法亦君臣ノ道ヲ措テ矣際
ノ道ヲ説ク故ニ近世人文ノ大ニ開クルニ従ヒ往
々無道ノ君出ルアハ之ヲ易置シ之ヲ廃シ
テ大ニ自主ノ権ヲ有チ国保全スルヲ得タリ
而シテ航海ノ術密ナルニ至リ遂ニ皇国漢
土彼ノ各国ト其始メ山谷ヲ越ヘテ相拒絶ス
ルノ勢ヲナセリ豈孤立ノ世ヲ以今ヲ論スル得ヤ

由是之ヲ見ルニ君臣ノ分ヲ厳ニスル世自主
ノ権ヲ得ルモノアラスシテ彼ノ君臣ノ道ヲ教ユ
ルハ人文ノ未タ開ケサルニ当テ行ハレヘシ神教ノ
如キハ上世未タ種族ノ分レサル時ニ行ハレヘシ
人文大ニ開ケ自由自主ヲ以テ道トナスノ世ニ当
テ行ハレヘキモノハ国教タルヤ明カナリ今宣教
博士等論定其教ヲ立フルト雖モ必クハ
神儒ノ二教ヲ飾スルニ過キス何ソ世益
アラン西教中大ニ世道ニ補アルモノヲ聚積

教トナス其中数種ヲ分ツト雖モ其奉ズル
ノモノ同シ且ツ時ヲ待テ其禁ヲ寛ニシテ其
政ニ益アルヲ見テ其彼各国ヲ乱スハ一ヲ容
レテ一ヲ禁スルニアラズ敢テ之ヲ禁セザル国ニ害ナク
敢テ之ヲ禁ズル国ニ害アラン其ゴ
トノ理ヲ説クベカラズ生霊ヲ害セザル国ニ害アラン其ゴ
ルル国ヨリ義理ノ強ニテ以テ其服心ニ入ル深カ
ラザラン哉ヲ以テ考フルニ其可行此何ソ
禁ズルノ理アランヤ蓋シ天下ノ執政名者之
ヲ心ニ蔵スベカラズ之ヲ口ニ出スベカラズ君之ヲ
言ハバ国人皆見ル所タラザル物議洶々
却テ開化ノ進歩ヲ妨ク故ニ生ル閣下
ニ謁スルヤ以為閣下ハ厳禁ヲ唱フルモ論説
中之ヲ寛ニスルノ意アラン豈計ランヤ閣下
断然禁ズルノ言アリ故ニ生我国教化ノ道
ニ於テ欠ルアラン之ヲ疑フ閣下願クハ之ヲ告ケ
ヨ本宿老命再拝